希望学

第7回　青木宏之さん

職場の希望

地域が元気になるためには、希望を持って働くことのできる職場がたくさんあることが大切だ。

釜石市には古くから製鐵所があり、釜石で働く人々に職場を提供してきた。しかし、高度成長期以降は、鉄鋼産業を取り巻くさまざまな条件変化の中で、規模を小さくしている。１９８０年代には、高炉や転炉などの鉄づくりの主要な設備を休止させた。現在は線材という細い鉄をつくる工場だけが動いている。こうした製鐵所の動向は釜石市に大きな影響を与えた。そのことを簡単な図表（９ページ上段グラフ）で確認してみよう。製鐵所の従業員数と釜石市の人口の減少が一定の関係を持っていることが確認できる。

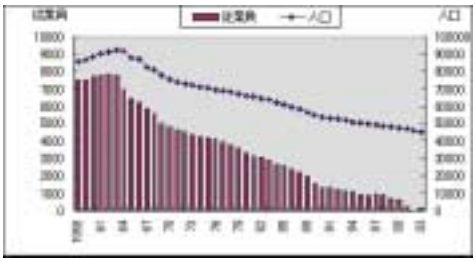
しかし、鉄鋼業について詳しい人ならば、逆の問いかけをするはずである。つまり、なぜ釜石製鐵所は縮小したのかではなく、なぜ存続することができたのか、と。１９７０年代から80年代にかけての日本経済は、もっとドラスティックなリストラが行われていても不思議のない状況であった。しかし、釜石製鐵所には線材工場が残され、現在も高い品質の製品を生み出し続けている。

釜石製鐵所が存続できた理由の一つは、そこで働く人々が求めたからである。もちろん新しい製鐵所への転勤を望んだ労働者もいたが、釜石製鐵所の多くの労働者は釜石で生まれ育った人々であるから、この土地を離れることに不安を感じた。あるいは、家庭の

事情で転居できない人もいた。そうした労働者の要求を会社に伝えるのは労働組合である。釜石の元組合長は、組合活動家としての生涯最大の目標は釜石の高炉を守ることであると考えていたという。そして、高炉休止計画に対しては、猛烈に反対した。元組合長は当時をこう振り返る。

―今振り返ってみて一番辛かったと思うのは、なんといっても高炉を休止して釜石の銑鋼一貫体制を放棄せざるを得なかったときでしょう。しかし後から考えれば一番辛い取り組みだったはずですが、その時はただ無我夢中でした。とにかく労働者の生首だけは飛ばさない、失業はさせない、ということを死守しようと決めました―

釜石市人口と釜石製鐵所従業員数



従業員数は、86年までは新日鐵、87年以降は釜石市(2005)『釜石市の概要』における４人以上の鉄鋼事業所における従業員数。人口は釜石市（2005）。

しかし、そうした願いは、労働組合だけではなく、多くの釜石経営陣も共有していた。製鐵所の入り口にランプのモニュメントと石碑があるのをご存じだろうか。これは、製鐵所の高炉を止める時に当時の所長が残したものである。所長は、高炉を止めずに済むように、東京にある本社に行って何度も陳情したが、産業全体の大きな流れの中で、高炉を止めざるを得なくなり、その無念の思いをこの記念碑に書き込んだのである。石碑には「永遠(とわ)に」と題された次のような短い文章が彫られている。なお、ここに書かれているとおり、ランプのモニュメントの火は高炉から移したのであるが、今、釜石駅の前にある製鉄１５０周年記念碑の火もここからとっているのである。

高炉から移した火がともる釜石製鐵所のモニュメント

永遠(とわ)に

当所における鉄づくりの歴史は、明治十九年十月十六日、四十九回目にして高炉での連続出銑に成功したことに始まる。

以来、百有余年にわたり操業を続けてきた高炉は、平成元年三月二十五日をもって休止したが、鉄づくりの原点である高炉の炎を、第一高炉より直接採火して本記念碑に移し、永遠に保存することとした。

鉄づくりにかけてきた誇りと情熱がこの炎に引き継がれ、今後とも、我々に挑戦する勇気と未来への希望を与えてくれることを願い、ここに記念碑を建立するものである。

しかし、現実には、優れた商品がなければ、製鐵所は生き残れない。大形工場という主力工場を１９８０年に閉鎖した時の責任者は、新しい商品を出さなければ製鐵所がつぶされてしまうという危機意識を持って次の製品開発に取り組んだという。そして釜石の技術者は努力を重ねて、自動車のタイヤに使う髪の毛ほどの細い鉄を開発することに成功した。これは当時の技術水準からすれば非常に難易度の高い商品であった。

以上、釜石製鐵所は、労働者、労働組合、経営陣の願いと具体的な働き掛けによって、今も存続しているのである。しかし、製鐵所だけではなく、どのような職場にも似たようなことがあるだろう。今ある職場や組織がどのような歴史を持ち、先人達がどのような努力をしてきたのかを知ることによって、同じ場所で働くことに誇りを感じることができるかもしれない。希望には、身近なことにどれだけ価値を見つけられるのかが大事なのではないだろうか。

モニュメントの足元にある石碑

Profile あおき・ひろゆき

1974年生まれ。県立高知短期大学准教授。専攻は人的資源管理、労使関係論。特に製鉄業に詳しい。